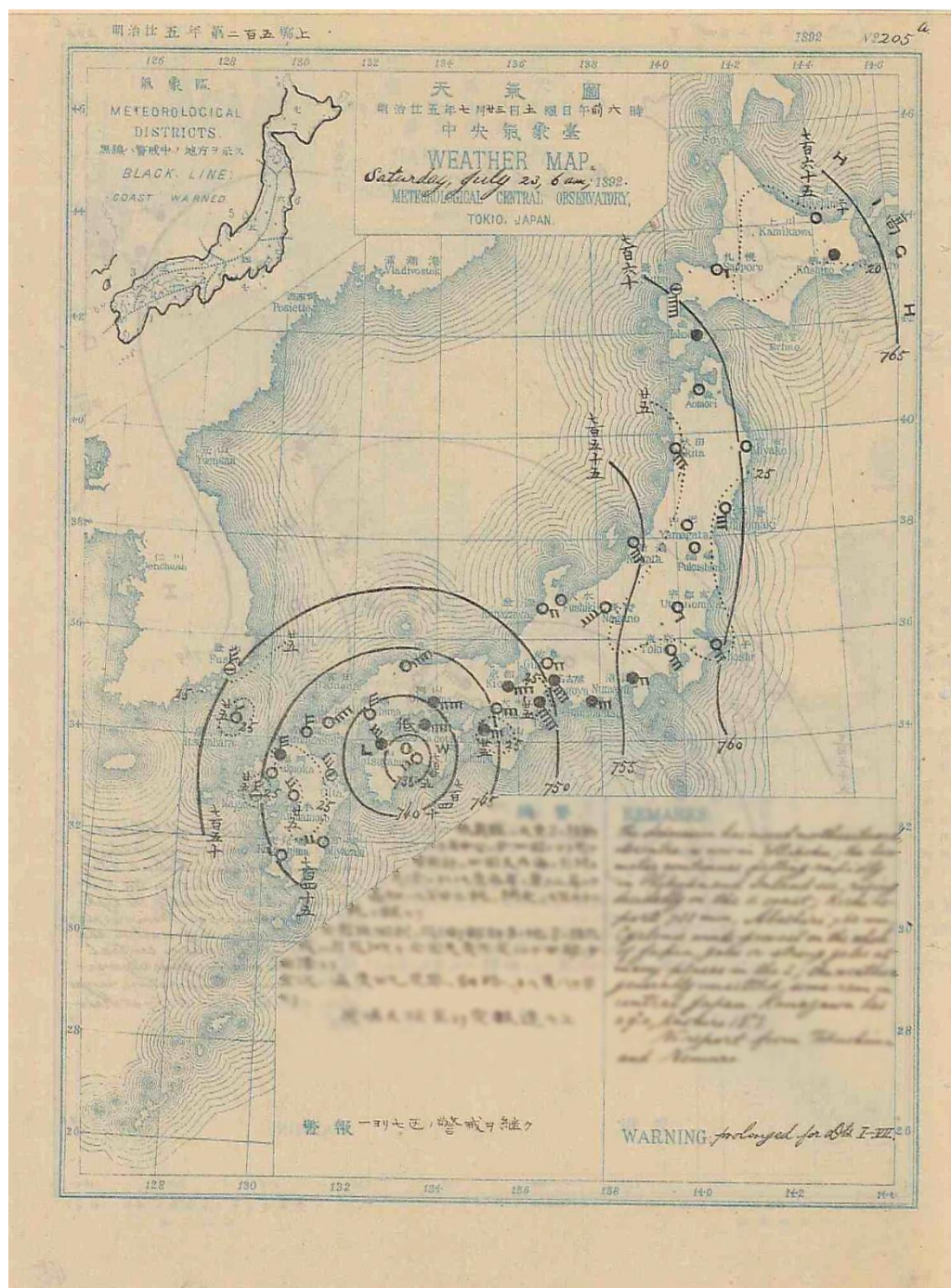


明治25年7月台風

明治25(1892)年7月23日～24日

■気象の概況

当時の中央気象台の天気図（7月23日）の「摘要」によると、低気圧は四国と瀬戸内海に中心がある（午前6時）。その後、瀬戸内海の東部で大雨、岡山では130ミリの雨が降っている（午後2時）。低気圧の中心は日本海に抜けたが、風雨は収まっていない（午後10時）。



「天気図」明治25年7月23日付 中央気象台 1892-07.

国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/pid/12896422>(参照 2025-01-28)

■被害の状況

7月23日夕方から24日にかけての暴風雨により岡山県内では真庭市久世で降雨量が247ミリに達し、岡山市街地は大半が浸水するなど県内全域に多大な被害を残した。全域の被害状況は以下の通りである（岡山県土木部防災砂防課ウェブサイト「岡山県の砂防の歴史」）。

死者 74人	浸水家屋26722戸
負傷者339人	橋梁墜落2539橋
流出・全壊家屋3188戸	山崩れ4579か所
半壊家屋 2221戸	

うち旧上道郡（現在は岡山市）の被害について矢田俊文（新潟大学フェロー）が「明治25年台風と岡山県上道郡の被害」と題して検証している。それによると①旭川と百間川の合流地点や百間川と砂川の合流地点の堤防が決壊②上道郡の被害は溺死者（11人）、流出家屋（206戸）、浸水地（5907町＝5857ヘクタール）が多く、とりわけ床上五尺（1・5メートル）以上の浸水家屋（1059戸）、浸水地（5907町）は県内で最も多い③堤防が決壊した高島村と光政村で溺死者が出ており、溺死者11人のうち9人がこの2つの村から出ている。当時の堤防決壊がいかに重大な事態を引き起こすかを物語っている。

トピック

夏目漱石の被災

夏目漱石（金之助）は明治25年の夏に岡山に逗留している。亡くなった次兄栄之助の元妻小勝の実家片岡家（現在は岡山市北区内山下、県庁舎南辺り）と小勝の再婚先である医家の岸本家（現在は同市東区金田）を訪ね歩き、歓待されている。この間、帝国大学（現在は東京大学）を落第して退学を決意した友人の正岡子規に手紙を書き「鳴くならば満月になけほととぎす」と句を添えて励ます。ところが子規に手紙を書いた3日後の7月22日から23日にかけて旭川が氾濫する大水害が発生。片岡家も床上浸水し、漱石は当初は上流から流れてきた牛や藁屋を面白そうに眺めていたが、足元がつかまり始めると一転、自分の本が入った柳行李を担いで県庁のある天神山へ一人で避難したという。その後、土地の有力者の光藤家に避難先を移し、8日目に片岡家に帰ると「心配していたのに」となじられるが、親戚の預かり物である漱石を真っ先に避難させた片岡家の事情と漱石の性格がよく分かる逸話である。

参考文献・岡山文庫280「岡山の夏目金之助（漱石）」